

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4071300554
法人名	有限会社エス・エイチ・シー
事業所名	グループホームひいの郷 (ユニット名 綾)
所在地	福岡県福岡市城南区樋井川4丁目10番10号
自己評価作成日	平成25年5月31日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人福岡県介護福祉士会
所在地	福岡市博多区博多駅前中央街7-1シック博多駅前ビル5F
訪問調査日	平成25年7月2日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

アットホームで居心地の良い環境づくりに勤め、施設内での閉ざされたサービスではなく、地域資源を積極的に活用し、開かれた施設を目指している。共同生活の場であることを活かし、それぞれが役割を持って個性を発揮できる生活が送れるよう支援している。また、利用者様には常に尊敬の念と親愛の情をこめて接し、自然でリラックスできる雰囲気を作るよう努めている。「あきらめない介護」を常に念頭におき、ケアに取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人代表者は、自分の親の介護が必要になった時、本人のペースで過ごせる“場”づくりという理想のホームを目指して10年前に開設している。門扉から花壇を抜けると中庭が広がり、テーブルやベンチを配置して、平屋建て2軒が別々に建てられている。事業所内廊下には、スナップ写真が多く飾られ、利用者の生活が訪問者にわかるようになっている。法人の理念を基に、二年半前施設長と現管理者で理念を見直し、「人と人との絆を深め助け合う生活・いろいろな個性を発揮できる暮らし・のんびりゆったりその人のペースを大切に・支え合い地域の中で生きていく・共に暮らし互いに尊敬し合う家族的な暮らし」と作り直し、各文頭は「ひいのさと」になっている。管理者や職員は、創設者の思いをしっかりと継承し、利用者の表情など観察して希望や意思を汲み取ってケアに取り組んでいる。時間がかかっても持てる力を活かし、むやみに介助することなくその人のペースや個性を大事にした穏やかで安心した暮らしが流れている。地域の人たちとの関係を築けており、さらなる広がりが期待できる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の良く見える場所に理念を掲げ、全ての職員は理念が実現出来るように心がけ、実践している。	2年半前に開設時の理念を見直している。ひいの郷(さ)との名前を文頭に入れて、地域密着の意義を踏まえながら、ケアのあり方を利用者・家族・職員にとって具体的にわかりやすい理念にしている。入職時やミーティング等で共有しており、職員の動きが気ぜわしくなる時にも、「ゆったりした時間で」と伝えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣の店に利用者と共に買い物に行き馴染みの関係を作ったり、ふれあいサロンを利用する事で地域の輪の中で人間関係を築き、交流している。	自治会の定期総会や町内の川の清掃に職員が参加している。回覧板を利用者と一緒を持っていくこともある。ふれあいサロン主催のバスハイクや中学校のコンサートに参加して、地域の方と交流している。近所のコンビニに買い物に行ったり、散歩時に近所の方と挨拶をして地域の一員として交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	研修の場としてオープンな姿勢をとっている。また、運営推進会議等を通じて、グループホームの日常を見てもらい、どのように認知症を理解し、支援したら良いかの話し合いが持たれている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホーム内で開催されており、ありのままの生活を見てもらっている。どのようなサービスを提供しているかについて話し、そこで交わされた意見は尊重し、ケアに反映させるようにしている。	2ヶ月に1度、利用者、家族代表、地域包括支援センター職員、民生委員、グループホーム協議会理事の参加で開催している。事業所の報告と共に、テーマを決めており、保健所職員によるハウスダストの話(換気や掃除の仕方)や、地震に関する(突っ張り棒の位置について)話題になり、そこでの意見を反映させている。	定期的に運営推進会議が開催されているところなので、今後は、認知症を理解して頂くことやさらなる運営への協力を頂くためにも、自治会や老人会、消防や警察関係等にも協力を得られるよう取り組むことを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議への参加依頼を出し、酸化された際には意見や情報交換を行っている。また、開設者研修やリーダー研修等の受け入れを積極的に行っている。	運営推進会議に地域包括支援センターの職員の参加があり、事業所の実情を報告している。経口摂取ができない利用者が退院して事業所へ帰ってくるにあたっての相談をしたり、書類の書き方について尋ねたりして連絡を取っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービスにおける禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関は、夜間は防犯上施錠するが、日中は開放されている。その他身体拘束に当たる行為は、切迫性、緊急性、非代替性がない限り一切行っていない。	利用者が一人外出した時には、さりげなく同行し自然な声かけを行っている。よく利用するコンビニや近所の方から連絡をもらうこともある。玄関の虫除けネットに鈴をつけたり、布団に鈴をつけたりして、利用者の動きや気配を感じる工夫をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修を通して職員が虐待防止について学ぶ機会を作っている。研修を受けた職員は、報告書を通して知識を共有出来るようにし、意識を高めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	当ホームでは、日常生活自立支援事業や成年後見制度を利用している利用者はいないが、職員は外部の研修を通して、それらの知識を得るようにし、いつでも活用出来るようにしている。	管理者や職員は、権利擁護に関する市主催の外部研修に参加している。研修後報告書を作成し、月1回のミーティングで伝達研修を行っている。参加できない職員については、回覧記録に目を通し、押印している。成年後見制度については、契約時に説明を行っている。	成年後見制度について利用開始時に説明しているが、その後の情報提供の機会として、家族会等でもおりにふれ情報を提供していくことを検討することを期待したい。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者、家族を交えて丁寧な説明を行い、疑問や不安が生じた際も、それに対して適切に答えられるように努めている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族の意見、要望には常に耳を傾け、健全な運営やケアのために必要と判断された場合は、意見を取り入れている。また、家族会を定期的に関き、意見交換を行っている。	家族訪問時や家族会等で常に問いかけ、何でも言ってもらえる雰囲気作りに留意している。また、一人ひとりの生活状況について月1回の便りを送付しており、それを読んで連絡をしてくることもあり話す機会となっている。小さな意見や要望等もミーティングで話し合い、反映させている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	社内の風通しは良く、職員の意見は管理者を通して、もしくは直接代表者に伝えることが出来、運営に反映される仕組みがある。	日頃からコミュニケーションを図るよう心がけ言いやすい雰囲気作りをしている。ミーティング時に意見や要望を管理者に伝えて、職員が増員されたり、休憩時間の見直し等に反映されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は各職員の働きを評価し、待遇に反映させる姿勢を持っている。また、各自に合った職場、役職への配置になるよう環境を整備している。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮し生き生きと勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保障されるよう配慮している	採用は区別なく行われている。各人の能力が発揮出来る様な職場環境を作り、実践で力をつけていくように指導している。また、各人の権利が一切損なわれないように配慮している。	職員の採用にあたって年齢や性別に関係なく、現在20歳代～60歳代の男女が勤務している。ギターや歌が得意な職員、料理好きな職員、絵が好きな職員等、その能力を発揮しながら生き生きと勤務している。資格取得に向けて応援をしている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	外部の研修の場を通して、職員は学ぶ機会を得られる。理念を念頭に、人権を尊重した行動を取るよう指導している。	管理者や職員は、グループホーム協議会主催の同和研修や、その他に尊厳あるケアに関する研修に参加している。参加者は、ミーティング時に伝達研修を行うようにしており、管理者は人権教育の取り組みを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員は、その能力を伸ばしたり、不足しているところを補うために、個人の現状に見合った研修を受けており、無理なくスキルアップ出来るように配慮している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会に属しており、協議会主催の研修や文化祭などで同業者と交流を図り、情報交換をするなどしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	必ず自宅に面会に行き、どのような暮らしがよいのかを実際に目で確かめ、また本人が不安に思う点やご家族の意見等を尋ね、どうすれば安心が得られるかについて考えるよう努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	訪問面接時、現在までの状態、施設への要望等を詳しく尋ね、共感の姿勢で対応することで不安を和らげて信頼関係を築いていくように努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅時での状況、家族や本人へのインタビューの内容を吟味し、また、施設に入所した場合に起こりうる混乱を想定しつつ、本人の立場に立った支援をする事に努めている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気作りを行い、家事の手伝いなど協力を仰ぐ。本人が役割を持って、個性を発揮出来るようにする。また、団欒やレクを共にし、共に生活するものとしての意識をお互いに持てるようにしている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族には、家族の協力がケアに不可欠である事を伝え、共に支えていくという姿勢をとるようにしている。また、行事等への参加の呼びかけを行い、一緒に活動する場を設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	以前通っていたかかりつけの病院への通院支援や、正月の帰宅支援、法事の際の帰宅支援など、本人や家族の希望があれば沿える様にしている。	馴染みの美容室へ送りだしたり、友人が訪問の際は、居室でゆっくり話せるようにお茶を出したりして、馴染みの関係が途切れないよう支援に努めている。また、家族の希望で100歳の誕生日祝いを外ですることになった時には、事前に体調を整えたり、事業所よりミキサー食を持参して介助をする等、家族や親戚縁者との繋がりも大切に支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の個々の性格と、そのマッチングを考え座席の配置を決め、お互いがお互いをスムーズに認識し、関わりあえる様にしている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご葬儀には必ず出席するようにしている。また、折にふれて電話等で挨拶をするようにしている。さらに、夏祭りなどにお誘いし、関わりを続ける様にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	当ホームでは、本人の立場に立ち支援することを目標として実践している。困難な場合でも、ミーティング等で本人が何を望んでいるか、ご家族の意向をふまえつつ議論している。	利用者本人との会話の中で聞き取ったり、表情やその人のサインの蓄積から思いの把握に努めている。また、家族からも意向や希望等を訪問時に会話の中で把握に努め、本人本位に検討している。困難な場合も利用者にとって何が一番最良なのか家族と検討している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族にアセスメントを行い、本人の生活歴を把握する。馴染んだ生活に最大限近づけるよう調整している。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の経過を観察し、気付きを記録に記載していき、なにができるか、何を好まれるかが把握出来る様、職員間で情報交換、並びに共有をしている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人及びその関係者の意向を反映してケアプランを作成し、状況に変化があったり、ミーティング等を通してより良いアイデアが生まれれば、即時反映するようにしている。	本人を主として、家族・医師等必要な関係者と話し合って介護計画を作成している。見直しは基本的には6ヶ月に1度としているが、モニタリングを毎月行い、その都度追加変更をし、現状に即した計画を作成している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	特に普段と異なった言動、ケアプランが本人の現状に見合っているかどうかについて特に記載するようにし、毎日の申し送りにて情報の共有を図っている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	例えば遠方であったり、移動手段を持たないご家族のために、通院の支援を替わりに行ったりと、ニーズが充足されるように柔軟に支援する姿勢がある。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のふれあいサロンの利用、地域の商店での買物、町内会の活動への参加など、なじみの関係作りを行っている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診の際は、本人及びご家族に相談し病院の選択をしている。ご家族の同伴が可能であればお願いするようにしている。	協力医のもの忘れクリニックをかかりつけ医としている利用者は、隔週の往診が実施されている。毎月個別に送付するお便りに受診の報告をしている。早く知らせる必要がある場合は、その都度連絡を行っている。歯科医の訪問もあるが、別の病院受診は家族が付き添われるが、できないときは職員が同行して適切な医療を受けられるように支援している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師には情報を細かく伝え、相談し、適切に受診や看護を受けられるようにしている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、病院関係者と連携できるよう関係を作り、利用者の状態を鑑みながら、なるべく早期に退院出来るように働きかけている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナルの手前の段階で、本人、家族と話し合いを持ち、事業所の方針や方策の説明を行い、チームで本人を支えて行く事を伝えている。	入居時に重度化した場合や終末期のあり方について事業所の方針を説明し、希望される場合は同意書を得ている。終末期を迎える時、再度医師・家族を交えて看とりの方針を話し合い、家族の揺れる気持ちを受け止めながら対応している。現在も終末期の対応中である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	外部の研修を利用し、その知識を得ている。また、利用者個々の想像しうる急変状態について、全職員がすぐにその対応法を閲覧できる資料を各居室に設置している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署と連携して避難訓練を行っている。運営推進会議でも災害について取り上げ、どのような協力体制を敷くことができるかについて話し合いが持たれている。	年2回利用者や家族の参加を得て夜間想定で総合訓練を実施し、消防署からアドバイスを得ている。消防署への自動通報装置は設定されており、スプリンクラーについては今年8月設置予定で進んでいる。避難経路、避難場所、水の備蓄など全職員が把握している。地域への参加協力の依頼はしていない。	運営推進会議の際、出席者に避難訓練の実施日を知らせているが、今後は有事に備え、訓練時の参加や、地域住民への協力依頼を行うことが望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の性格を熟知し、本人の立場に立って物事を見ることで、どのような接し方がふさわしいかを見極めている。いかなる時も親愛と尊敬の念をこめて声掛けを行うようにしている。	理念の中に「互いに尊敬しあう」という文言があり、人前で注意したり、無理強いすることがないよう一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを守ることを常に気をつけている。個人記録等の書類は事務室内の棚に置き、なおかつカーテンをつけて見えないようにして管理している。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人が、感情を表出しやすいような雰囲気、関係作りをしている。表出が困難な方でも、どうしたいかを普段の生活の中から探っていく、その思いを代弁した支援ができるように努めている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の大きなスケジュールはあるが、それに捉われず、各人のペースや希望に沿った支援ができるように努めている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に美容室に通う支援をしている。また、髪などに乱れがないよう常にチェックしている。服装も、本人や家族の好みが反映されたものを着てもらっている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	包丁で食材を切ってもらったり、食材の準備や料理の盛り付け、食器のすすぎや食器拭きなど、一人一人の能力や好みに見合った作業をしてもらっている。	利用者に希望を聞いたり、誕生日には本人の希望も聞いたりして職員の食事が献立作成している。食材は発注しており、不足物がある時は、利用者と一緒にスーパーへ出かけている。重度の利用者にはその人に応じてミキサー食にし、安全に留意して支援している。職員も一緒にテーブルに着いて、会話を楽しみながら同じ食事を摂っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	各自の状態や体格、好みに合わせ、量や形態を変えて提供している。水分量はチェック表をつくり、確認、調整が出来るようにしている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアを行い、自力で可能な方は自分で、介助が必要な方は職員が行う。週1回、歯科の往診がある。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を活用し、排泄パターンの把握に努めており、各自のタイミングに合わせて誘導している。自立されている方はその力が維持出来る様に支援している。	排泄記録表でパターンを把握したり、排泄前の行動や仕草の変化も把握して、トイレ誘導や介助を行っている。できるだけオムツをしない方針にしており、オムツ着用の方が一人いるが、リハビリパンツ・パット・布パンツをその人に応じた組み合わせで対応している。リハビリパンツから布パンツになった人もおり、自立支援に努めている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝には牛乳とヨーグルトの提供を行っている。散歩やステップ運動を行い、便秘の改善に努めている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	希望があれば、いつでも入浴出来るようにしている。また、関連施設であるデイサービスの大浴場も利用する事がある。	利用者には基本的に週に3日、夕食前に入浴を楽しんでもらっている。拒否される場合は、無理強いすることなく、声かけを工夫したり、対応する職員を変えたり、翌日に変更したりして、一人ひとりに合わせた支援をしている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各人の状態や習慣に合わせて、午睡の時間を設けるなどしている。不眠状態が続くときは、担当医に相談し、安眠が得られるための方策を練る。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全職員が薬の一覧を閲覧することができ、その作用についての知識を得ている。変化があれば記録に残し、担当医と相談し、指示が受けられるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人が何らかの役割を持ち、能力を発揮出来るようにしている。個人の嗜好や趣味を把握し、そのための支援をしている。		
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常的な散歩や買物の支援をしている。花見やバスバイクなどを企画し、家族や地域の方に参加協力を依頼することがある。法事や墓参りなどは家族が自主的に連れすることがあるが、職員はそのための支援をしている。	早朝(陽が登る前)に10~15分程度散歩をしている。近隣の人から声をかけられることもある。入居前の暮らしの中で買物好きな方がおられ、できる限り満足が得られるように支援をしている。希望者に外食支援等も行っている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物の時などは、本人にお金の支払いをお願いすることがある。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族より贈り物が届いた時など、電話でやり取りが出来るように支援している。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節や年間行事に相応しい飾り物をしたり、音楽をかけている。室温は常に配慮している。また、職員の会話が利用者の不快を招かないように気を付けている。	広い庭の中に民家が2軒別々に建てられ、玄関も普通の家の雰囲気である。庭ではテーブルに大きなパラソルを広げてお茶をしたり、ゆったりと過ごせる場がある。台所とリビングは間仕切りがなく、話し声や調理の音や匂いが伝わって生活感があり、居心地よく過ごせる空間となっている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	マッチングを考えて席の配置をしたり、または一人の時間に没頭出来る様な配置にしたりと柔軟性を持たせている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	普段から使い慣れた調度品、道具、飾りなどを自由に持ち込めるようにしている。本人の好みの部屋になるべく、家族に働きかけることもある。	テーブル、椅子、タンス、仏壇、鏡台、ラジオ、雑誌や本、家族の写真、家族が作られたパッチワークのタペストリー等を持ち込み、家族との繋がりやこれまでの生活習慣を大切に、一人ひとりが安心して過ごせる環境づくりをしている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	必要であれば、場所が明確に分かるような張り紙をする。安全や自立を脅かしたり、事故につながるようなものは予測し、設置をしないようにしている。		